

見聞雜記集卷之八

小葉研齋

輯

市行司公相撲之書上寫于時

二月十日

上覽

相撲之記天照大神之時分始朝廷

聖代天皇御宇相撲之記今云行江海

我地法水正系之端而已相成勝負之裁

新録史記云武天皇神龜年中為良之部

所領通江國志賀之清林方中者名曰清

行司之妻のらねる公お撲之式要浦お傳

お孫お續之れ多来て其乱お續子以今云

行司中志賀家も自然形絶はれ

一後為解院文治年中再お撲之節今云て行司

志賀家新絶て上志江行司でお勤者並

少等少座れれ先祖古田豊後も家次方中

者絨前國所上志賀之故實傳来はれ言達

敵國方叙上佐近風之名を賜朝廷にお撲

同行自にて中々之を言ふ家勅令け時石合

用外本羽獅子とて法園所を賜代にお撲



子良會式お勤中いふ永久と云い終りて人々も  
中絶仕り

一 正親所院永祿年中相撲と云い合ふ所は此十  
三代目迄風お勤中例お勤中仕

一元龜年中二條園白清良公今日お勤と云い  
法二流と云い事と云い一味流風の中いふ  
無為帽子持衣居衣口幅と云い袴方と云い  
信長考と云い

権現様神代と云い相撲と云い式お勤元和の年  
九月十七日終り列和等山

東照宮神系禮お勤と云い式儀 伊勢神系礼奉  
行相此系礼と云い及云流事と云い合お勤中いふ  
伊力洋傾仕り

一 十代目迄風と云い 朝廷お勤と云い合ふもいふ  
中絶成行中いふ二條極水歌と云いお勤と云い月  
筋と云い序と云い甘地と云いお勤中及云流事と云い  
と通お勤中いふ元年中常家と云いお勤中いふ

一元祿年中

常憲院様牧野俊後と云いお勤中 成お勤  
上流と云い第お勤中及云流事と云いお勤中及云  
入門と云いお勤中



將軍家 上院々武相傳取々澤願物仕  
一元祖公私連部合十九代前々々通  
禁程止外々西方横公追々澤願々果今以  
將傳お携々故實傳授仕来々  
一當時諸國々行司 兼 力士方止々免許証取

分代々々々中々

右々通達々居々所々

細川越中守家来

寛政元年十月

右田舎左番門

台風止々免許傳授々焉

免許

一横綱之事

右々台風推々助相撲之任依々授与  
半々来方屋入々節追相用下中々  
依々如件

寛政元年十月九日

本朝相撲々司行司

十九代

台田追風判



○上覽之一式

寛政三 辛亥年春相撲

勸進元 鍛山喜平治

差添 伊勢海村右衛門

右春相撲本所於回向院境内興行仕候處町御奉行池田  
筑後守殿御差紙ニテ勸進元差添罷出へキノ旨申來リ  
早速喜平治村右衛門罷出候處相撲 上覽之御内意ニ  
付御書附下サレ候

同廿三日勸進元差添書附持參之處土俵繪圖并相撲名  
前二枚ツ、明廿四日持參致スベキ旨申渡サレ翌日相  
撲之式并 上覽御場所繪圖兩ヤウトモ池田筑後守殿  
御役宅江差出申候

但土俵并四本柱引幕トモ伊勢海村右衛門  
仰付ラレ諸負ニ仕立上ル

同廿六日池田筑後守殿御役宅ニ於テ喜平治村右衛門  
江 上覽相撲仰付ラレ難有旨御諸仕候

六月二日場所見分有之相濟同日相撲取組相撲人惣人  
數人別書看出候且又右之通今度 上覽被 仰出候共相  
撲人之儀随分萬事相慎之我雜ケニシギ 與之様事寄  
共急度可申 付段被 仰渡候

六月五日又候喜平治村右衛門召出サレ筑後守殿御役  
宅ニ於テ當十一日相撲 上覽可有之旨仰付サセラレ  
難有御諸申上ル旦台來 禁庭第會ノ祭事相勤候相



樸司御行事 吉田追風末流 吉田善左衛門被<sub>ニ</sub> 召出則罷  
出<sub>レ</sub>台法之通相勤申候土俵場之儀勸進相撲トハ格式等モ  
別ニ候故左ニアラス  
六月十一日曉六ツ時竹橋御門外御眷屋前ニテ惣年寄  
行事相撲人殘ラズ深帷子麻上下帶刀ニテ相揃場所休  
息所溜<sub>リ</sub>江入<sub>リ</sub>差扣罷有候

○上覧土俵之古實

一 四本柱之間三間四方柱ヨリ柱マデノ内土俵七俵  
ツ 四ツ合セテ數二十八俵ハ天之并八宿東西南  
北ニ須弥四天ヲ合セテ惣數三拾六地理汰釵相撲  
以古三十六人ヲ司法ナリ

一 内丸土俵數十五ハ天之九地之六東西ノ入口ハ陰  
陽和順之理也外ノ角ヲ儒道内ノ丸ヲ佛道中ノ幣  
束ヲ神道コレ神儒佛ノ三ツナリ

一 中央ニ幣束七本立神酒奠斗供物三方右之品飾<sub>リ</sub>  
置始司追風罷出天長地久風雨順治之祭事暫クノ  
内アリ

一 惣テ土俵四本柱易ノ定ナリ土俵之内ヲ大極ト定  
左右之入口ヲ陰陽ト取四本柱ハ四時五行中央之  
土ヲ加水火土金水又ハ仁義禮智信之五常ナリ水



引ハ黒赤黄三色之絹ヲ以北之柱ヨリ卷初メ北之柱江卷納ルハ出人入人ヲ清ムル心ナリ北ヲ極陰ト云相撲ニ是ヲ役柱ト名附俵ヲ以テ形ヲナスハ五穀成就之祭事ナリ

一 上覧之土俵ハ勸進相撲トハ相違ナレトモ易一躰之理違フ事有間鋪ナリ

右祭事濟土俵之上ニ飾リ置品々行事四人東西ヨリ出テ持テ入ル後行事先ニ立テ相撲人二十人程ツ、段々ニ出テ禮義ヲ正シ土俵之上ニ平伏ス殘ラス揃ヒ行事相圖致ス其時一統土俵入濟又平伏ス一人ツ、圍ニ入ル如此シテ東西六度ニ濟東西之關取横綱ヲ帶メ繪圖之通土俵入ス其後名乗言上行事東西ヨリ一人ツ、出又相撲合セ候行事一人土俵之内ニ入テ次ニ東西三リ相撲人出テ平伏ス言上之行事土俵江出テ東之方誰西之方誰ト高聲ニ名乗テ入ル其内白張着用之者水ト紙ヲ遣ス也相撲人土俵掛ル行事聲ヲ掛テ中ニ立テ古法之如ク待ナシニ取組行事勝相撲誰ト名乗尤行事ハ代々殘ラス侍烏帽子素袍着用ス合行事ハ素袍之肩ヲ絞リ出ル又四本柱之元ニ行事四人平伏シテ扣居ル是ハ勝負依怙ナク見分ル事ヲ司ル右代リ々行事十四人ニテ相勤申候



○上覽相撲之勝負附

六月十一日上覽相撲取組

△此印勝

中入後

但中入之間相撲人江  
赤飯下サレ候

行事 式守見藏

△緑山

シタテナケ

荒瀬川

行事 木村庄之助

九紋龍

ヨツテツノ

△柏戸

△陳幕

ノトワツノ

雷電

行事 吉田追風

小野川

キガチ 谷風

スベテ 九八拾三番

弓弦扇子三役古法之通勝之方江相渡

九ツ時相撲始リ七ツ時無滞相濟

○上覽行事之式

年寄三拾六人深帷子麻上下着用ニテ土俵場江代リ々  
相結行事拾四人素袍ニテ侍烏帽子木劔ヲ帶シ追風始  
土俵入之節掠色之素袍侍烏帽子着用ニテ土俵ノ上ニ  
建チ鋪其上ニテ相撲之古實言上ス後谷風小野川取組  
之節古例ニ依テ往古追風 禁裏ヨリ賜リタル紫ノ打  
紐付タル獅子王之團扇ヲ持風折烏帽子狩衣四幅之袴  
着用土俵之上草履 御免ニテ相勤候











なほらて堂解いすといふ声に然るる小治をきき  
しとて堂——とて志すに之よりぬるひを  
いふ——たれといて堂解いきてこえに西の山  
ふとあてもなき道に小野川さうあふまふ及ふ  
あ——さまたちい——と追風を風は堂解をわけ  
てあまにふたりて弓矢さくきとせしはみ  
小野川流るるまゝと勝負せむなりとてまた小  
治うけつたれとて——たふふふと矢を放つて  
争ひこもぬこら——なまて小野川の宿禰縣連  
城——ぬい島ふはる河原のまはれ城に入せし  
中——あつても事——うらわめをきき有るま  
にふふ——言風を城けうや海ひうけにふみゆ  
早——あしあつてけしき入ぬきと城流る——と  
織田内府乃道はつ國常樂寺ふとて堂と  
いふ流の城まゝとあつて流る——時勝る城貴し  
あるとて今ふ——あれといふ

勝るに今治生擇り  
え乃流るる例とて

寛政四壬子年初秋四算寫